

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	大井 さき
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 梅堯臣詩研究—慶暦後期を視座として—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	小川 恒男	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	川島 優子	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	有馬 卓也	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	陳 翀	
審査委員 (Name of the Committee Member)	浅見 洋二 (大阪大学教授)		
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>梅堯臣 (1002-60) は宋代を代表する詩人であり、従来ほとんど取り上げられることのなかった、日常生活のありふれた事物を積極的に詠じたことで知られる。本論文は、北宋・仁宗の慶暦4 (1044) 年から8年までの「慶暦後期」を視座として、梅堯臣が独自の詩風を形成していく過程を、精緻な作品読解に基づき、より具体的に明らかにしようとするものである。</p> <p>論文は三部、七章から構成され、附録として論文中に取り上げた梅堯臣の作品の詳細な訳注を添える。</p> <p>第一部では慶暦後期の詩の主題、表現に質的変化があったことを論じる。第一章では作品数の増加と詩人の生活環境の変化とから慶暦後期を一つの時期として捉えることの妥当性を確認する。第二章では「風」を例に、従来の詩が詠じようとしなかった新しい題材に着目し分析を加える。梅堯臣は風という新しい主題を取り上げる一方で、詩としての完成度を高めるために様々な工夫を凝らしており、そのような「主題の拡張」が詩の本質を見直し、物の見方を変える契機となった可能性を指摘する。第三章では慶暦後期に対句を伴わない詩作が増えていることから、逆に律詩と古詩それぞれの対句表現を取り上げて検討し、平仄をはじめとする規則という伝統の枠を継承・利用しつつ、そこから逸脱していこうとする志向が見られるとする。</p> <p>第二部では他の詩人たちとの共作、競作関係が梅堯臣の詩風を変化させていった過程を記述する。第四章では複数の詩人が短い句を繋いで作る聯句を手がかりとして、慶暦後期の作には詩作を共にする相手と技量を競い合おうという意識が強く現れ、結果として、自分でも意図していなかった表現を生み出し、通常では詩の対象とならない日常生活の細部にまで筆を及ぼすことになったと結論付ける。第五章では慶暦後期の応酬詩を対象に、対人関係の変化が梅堯臣の詩風を変化させたことを論じる。慶暦後期、梅堯臣は若者たちを相手に詩を作るという場を得た。彼らとの応酬によって生じた場の気楽な雰囲気や唱和という制限が梅堯臣詩の表現をより自由なものにし、その詩風を変化させる一因となったことを指摘する。</p> <p>第三部では皇祐元 (1049) 年以降の展開を概観し、「慶暦後期」が梅堯臣詩全体の中で果たした役割について再検討する。第六章では皇祐以降の創作の内、伝統へと回帰したかに見える作品を取</p>			

り上げて分析する。皇祐以降の梅堯臣は「雪」など伝統的な主題を繰り返し詠じる。伝統からの逸脱を試みた慶暦後期とは異なるように見えるが、作中には斬新な表現を追求する姿勢を明瞭に見出すことができ、根本的な断絶はないと論じる。第七章では慶暦後期に顕著になった特徴が梅堯臣詩の中で「成熟」していく過程を追う。「日常生活の細部を詠じる」詩のひとつとして家族を描く詩を取り上げ、家族をうたう作品群が在りし日の妻を描く中で形成され、皇祐以降になると家族をうたうことが逆に詩を斬新なものにしていったとし、目的が方法へと転じる過程を丹念に追っている。

慶暦4年の妻の死が梅堯臣の詩風の形成に大きな影響を与えたことは、多くの先行研究が既に言及するところである。本論文が詩風の形成過程を個々の作品に即して具体的に記述した点、妻の死ばかりでなく慶暦後期に於ける対人関係の変化、取り分け年少の友人たちとの交流もまた伝統からの逸脱とも呼べる新しい主題、挑戦的な表現を生み出す契機となったことを明らかにした点は高く評価できる。梅堯臣詩の全体像、中唐文学の受容、北宋詩壇との関わりなど残された課題は多くまた大きい、今後なお十分に発展の余地のある好論文である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)